



SELF INTRODUCTION

高知医科大学免疫学教室

*Department of Immunology,
Kochi Medical School*

本学は、黒潮あらい高知県中央部の南国市に位置し、昨年、開学 20 周年を迎えました。そのなかで当免疫学教室は、わが国初の独立した免疫学講座として 1980 年に開講し、藤本重義教授、山元 弘助教授（現大阪大学薬学部教授）他 5 名の人員で、文字どおり“ゼロ”からのスタートをきりました。現在は藤本教授以下、高田 優講師、濱里真二助手、沈 淵助手のスタッフを中心に総勢 13 名のメンバーで日々研鑽を積んでおります。

研究のメインテーマとしては、免疫応答機構、特に T 細胞応答の細胞性調節において、腫瘍免疫を中心にその生物学的意義に関する研究を主としております。

動物実験では、担癌生体を腫瘍に対して破壊・排除しようとする“正”の免疫応答と、それを抑制しようとする“負”の免疫応答とのバランスの上になっっているという考えでとらえ、前者の主役が、腫瘍特異的細胞障害性 T リンパ球 (CTL) であることを明らかにして、その誘導・効果を解析し、同時に特異的 CD 4 陽性リンパ球も CTL の効果に重要な役割があることもわかってきました。一方、後者にもやはり腫瘍特異的な CD 8 陽性リンパ球や CD 4 陽性リンパ球の反応が大きな役割を果たしていることを解明してきました。

これらの研究をふまえて、本教室でマウスの腫瘍免疫を研究した長崎大学第 2 内科の橘川桂三先生が、1986 年長崎にて担癌患者末梢血より自己腫瘍特異的 CTL を誘導し、その CTL 源を繰り返し患者に移入するという CTL 療法をはじめて施行し効果をあげました。これをうけて本教室でも、1987 年より本格的に CTL 療法の開発研究および、学内倫理委員会の承認をうけてその臨床応用を開始しました。まだ種々の困難な面もありますが、基礎研究室の特質を活かして動物実験からのフィードバックも合わせて、その解析・改善を積み重ねて現在に至っております。このような基礎研究が、新しい臨床応用という最終目的に直接つながっていく方向性がとても大切で、その二つの分野の橋渡しとして貴重な研究と考え日夜努力しております。さらに、腫瘍免疫だけでなく、ブドウ膜炎、心筋症などの自己免疫性疾患や移植免疫のモデル実験など、多岐にわたって展開しています。

教育の面では、内容豊かな特色のある実習を組み込んだ講義や、中国をはじめとする国内外からの大学院生・研究生の受け入れを積極的に行っております。また、他大学との共同研究も国内にとどまらず、ローマ大学腫瘍外科 (Prof. Marcellino) などとの交流も行い、広く活躍の場を拡大していきたいと考えています。

(濱里真二)